

岐阜県立関高等学校地域研究部報告

第2号

特集： 江馬修の学問・芸術と生涯

- ・『ひだびと』で江馬修は何をめざしたのか
梅田拓海 辻龍成 岡本優奈 土田真菜 那須優花 小林未紗 …………… 2
- ・ 江馬修の学問と芸術的抵抗 ～表現としての考古学・文学・演劇～
地域研究部・文芸部・演劇部
梅田拓海 辻 龍成 江崎晃定 片桐昂大 岡本優奈 土田真菜
小林未紗 那須優花 山中元太 石原伶緒 吉川奎騎 …………… 5
- ・ 遺跡から見る縄文の人々の生活とその変遷 ～岐阜県美濃市の事例～
梅田拓海 …………… 18
- ・ 小原佐忠治と美濃加茂事件
林 直樹 …………… 28
- ・ 研究の経緯（関高SGH情報より） …………… 31
- ＜特別寄稿＞
 - ・「行政機関と高等学校が連携した地域史研究の試み ～飛騨市の事例～」
三好清超（飛騨市教育委員会）…………… 37
- ・ 後記 …………… 40

2020年5月18日

『ひだびと』で江馬修は何をめざしたのか

梅田拓海 辻龍成 岡本優奈 土田真菜 那須優花 小林未紗

1 考古学と文学の関係性はあったのか

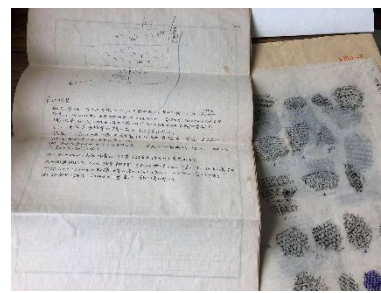
ひだびと論争で有名な江馬修（赤木清）は、小説「山の民」で知られる作家でもあった。雑誌「ひだびと」における考古学の研究活動と小説連載の時期はほぼ重なる。このふたつの活動が相互に関わりをもつのか関心を持った私たちは、考古学と文学の両面から江馬の生涯を追うこととした。

2 土器研究から「ひだびと」論争へ

江馬は土器研究の必要性を熟知していた。「ひだびと」論争以前の江馬は、ひじ山遺跡や糠塚遺跡の採集資料を中心に土器研究を熱心に行った。各地の研究者と交流を重ね、全国的動向を見極めながらも飛騨の特質把握に努めている。江馬が編年偏重傾向を批判した背景には、マルクス主義に学んだ社会経済史的観点があった。居住形態や生産活動に着目した石器時代研究は、マルクス主義に基づく歴史研究の実践であり、特高の監視を受けながらも研究活動を続けた。



雑誌「ひだびと」



糠塚遺跡調査時の記録

3 八幡・江馬と文化領域論の構想

編年学派のひとりであった八幡一郎は、「ひだびと」論争の終局と同時に、北部飛騨における文化領域論を構想する。早くから硬玉製品や北陸系土器の飛騨への浸透を重視していた八幡は、江馬の協力を得て宮川流域の考古学調査を開始した。戦後、「ひだびと」論争に関し「編年偏重の戦前の縄文文化研究は…正しい問題意識をみずからの手で抹殺した」⁽¹⁾「考えが噛み合わないまま終わった」⁽²⁾などの評価がなされたが研究の実情とは異なる。飛騨では編年研究を越えた新しい研究が芽吹こうとしていたのである。残念ながらこの研究は、戦局悪化と敗戦によりついに実を結ぶことはなかった。

(1)戸沢允則『日本考古学を学ぶ1』1978

(2)永峯光一『論争・学説 日本の考古学2』1988

4 江馬とマルクス主義

関東大震災直後、江馬は人道主義からプロレタリア文学へと転じたが、特高による逮捕後に帰郷し郷土史研究や小説執筆に没頭する。しかしこれは偽りの転向であり、石器時代研究は無論のこと、「山の民」執筆のための調査（文献精読、聞き取り調査等）もまた実証的な明治維新史研究であり、農山村の社会経済史研究そのものといえる。

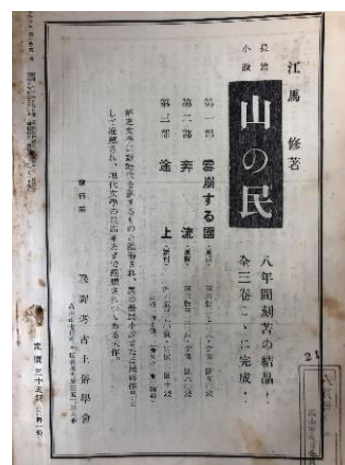
江馬は編年偏重の土器研究を批判した論文の中で、マルクス主義歴史学の現状を「現実

の理解よりも公式を振り回すことの方に 관심이強く働いている」と批判している。小説「山の民」は、教条主義的解釈に陥りがちなマルクス主義歴史学への批判の書でもあったと考える。敗戦後、江馬は日本共産党に入党、再度上京しプロレタリア文学界に復帰するが、その後、日本共産党と決別し「山の民」の改作に余生を捧げた。戦後は考古学とは一切かわっていない。

5 江馬と小説「山の民」

帰郷した江馬は、綿密な調査の上、明治2（1869）年の百姓一揆、梅村騒動を小説化した連載を開始した（「山の民」として出版）。「労働者の惨状の文学的表現」「社会改革と結びついた文学」をプロレタリア文学の定義とするならば、この小説は必ずしもその範疇とはいえない。確かに農民の惨状についても詳しいが、一方で、敵視された梅村速水知事をはじめ、政府や町方など、様々な視座から歴史に翻弄される人々を描いた本格的歴史小説であり、大岡昇平は「まぎれもなく、わが国最高の歴史小説」と評価した（『歴史文学の問題』1974）。この時期、マルクス主義者の間で、維新後の日本を「絶対主義」とみるか、「ブルジョワ革命」とみるかで激しい論争が交わされた（日本資本主義論争）。直接の言及はないが、飛騨維新史を社会経済史的視点から描こうとした江馬がこの論争に無関心であったとは思えない。

「山の民」は「飛騨維新史研究の文学的表現」であり、同時に日本資本主義論争に対する江馬の「意見書」でもあったのではない。



小説『山の民』の広告(ひだびと掲載)

6 成果と課題 江馬生誕130年を迎えて

今回の研究を通じ、私たちが得た結論を以下にまとめたい。

- ・偽装転向した江馬は、飛騨の石器時代史と明治維新史を題材に、特高の監視をかいくぐりながら社会経済史研究を試みた。
 - ・「ひだびと」論争のみならず、土器研究や文化領域論構想にも注目し、江馬や八幡の活動を総合的に評価すべきである。
 - ・小説「山の民」は飛騨維新史研究の文学的表現であった。
 - ・石器時代史・維新史ともに、地域から歴史の大局を照らそうとの視点があった。
 - ・考古学研究では編年学派を厳しく批判したが、維新の研究をめぐる論争に関しては沈黙を守った。特高の監視を恐れてのこと考えられる。
- 一方、今後の課題としては、以下の点を挙げたい。
- ・戦後の飛騨の縄文研究、郷土史研究の動向。
 - ・演劇活動に関心を寄せ、当局の再捜査を受けた1940年代の動向。



江馬資料の検討会(高山市風土記の丘学習センター)

江馬の生涯

- 1889 岐阜県高山市に生まれる
- 1906 斐太中学校中退 田山花袋の書生となる
- 1911 『早稲田文学』発表の「酒」でデビュー
- 1916 長編『受難者』がベストセラーになる
- 1926 プロレタリア作家として活動開始
- 1929 特高に逮捕される
- 1932 飛騨に帰郷 考古学研究、執筆活動開始
- 1934 飛騨高山で雑誌『ひだびと』を創刊
赤木清の筆名で考古学論文を執筆
同時に長編『山の民』執筆
- 1937～38
「ひだびと」論争 文化領域論構想に基づく共同調査
- 1942 飛騨移動劇場の練習中に特高警察の捜査を受ける
- 1946 日本共産党に入り飛騨地区委員長となる
- 1966 文化大革命の評価をめぐり日本共産党を離党
- 1975 東京都立川市の自宅で死去 戒名は焰燿院修智精進居士



ひじ山遺跡にて（1939）

追記

- ・本稿は、2019年日本考古学協会総会高校生ポスターセッションにおいて、最優秀作賞を受賞したポスターを論文形式にまとめたものである。
- ・使用写真は高山市教育委員会より提供していただいた。

江馬修の学問と芸術的抵抗

～表現としての考古学・文学・演劇～

岐阜県立関高等学校地域研究部・文芸部・演劇部

梅田拓海 辻 龍成 江崎晃定 片桐昂大 岡本優奈 土田真菜
小林未紗 那須優花 山中元太 石原伶緒 吉川奎騎



1936年のひじ山遺跡発掘。左が江馬修。(高山市教育委員会提供)

目 次

はじめに ～研究テーマについて～	・ ・ ・ ・ ・ (地域研究部)	6
1 江馬の思想的遍歴と飛騨帰郷までの経緯 1906 ～ 1933	・ ・ ・ ・ ・ (文芸部)	6
2 土器研究の進展と雑誌『ひだびと』 1934 ～ 1936	・ ・ ・ ・ ・ (地域研究部)	6
3 『ひだびと』論争とその後の新展開 1937 ～ 1940	・ ・ ・ ・ ・ (地域研究部)	6
4 研究の断絶と敗戦、その後 1941 ～ 1975	・ ・ ・ ・ ・ (演劇部・文芸部)	7
5 歴史小説『山の民』を読み解く	・ ・ ・ ・ ・ (文芸部)	7
6 江馬の考古学と維新史研究	・ ・ ・ ・ ・ (地域研究部)	9
7 江馬の演劇活動	・ ・ ・ ・ ・ (演劇部・文芸部)	9
まとめにかえて ～江馬にとっての学問と芸術的抵抗～	・ ・ ・ (地域研究部・文芸部)	10

はじめに ～研究テーマについて～

関高等学校では、昨年度秋より郷土岐阜の先人、江馬修（えまなかし、1889.12～1975.1）の研究を進めてきた（注1）。江馬は考古学者、小説家、劇作家としての顔を持つ人物である。江馬の活動した昭和前期は厳しい言論統制下にあった。表現者にとって困難な時代、江馬が何をめざしたか考察していきたい。研究・執筆にあたっては、地域研究部が考古学・郷土史分野、文芸部が小説分野、演劇部が演劇分野を担当した（注2）。

1 江馬の思想的遍歴と飛騨帰郷までの経緯 1906～1933

1906年、江馬は小説家を志し、旧制斐太中学を中退し上京する。田山花袋の書生や代用教員、区役所臨時雇いなどを経て、1911年、短編小説「酒」で文壇デビューを果たす。1916年の長編小説『受難者』は、人道主義を基調とする恋愛小説として知られベストセラーとなった。そんな折、関東大震災の混乱の中で起きた社会主義者や朝鮮人・中国人の殺傷事件に衝撃を受け、同時に人道主義に限界を感じプロレタリア作家へと転向する（注3）。

社会主義に目覚めた江馬は、全日本無産者芸術連盟（ナップ）の機関紙『戦旗』に属するプロレタリア作家として活動を開始したが、1929年、江馬は特高に逮捕され、40日間留置の後、起訴猶予処分となった。弾圧を恐れた江馬は、1932年12月、飛騨に帰郷し、当局の監視を欺くために郷土研究誌編集や考古学研究に心血を注いだ。

2 土器研究の進展と雑誌『ひだびと』 1934～1936

1934年4月、江馬は東大人類学教室を訪ね、多摩川流域の遺跡調査を行うなど熱心に活動した。9月には再度高山へ戻り、翌1935年1月、郷土研究誌『ひだびと』を創刊、考古学論文執筆を本格化する。創刊号には、「私たちの郷土を新しく見直しましょう」「郷土の文化を高めるために努力しましょう」との目標が掲げられている。過去の経歴を覆い隠そうとの意図もあっただろうし、郷土愛に訴えて支援者獲得をめざそうと考えたのであろう。

以後の江馬は、考古学論文と同時展開で、のちの『山の民』の原型となる小説「飛騨の明治維新」を執筆した。この時期の江馬の考古学的関心は、糠塚遺跡の土器分析に始まる飛騨の土器研究にあり、分類・編年研究をすさまじい執念で推進する。

『ひだびと』（1936年3月）誌上に掲載された「江名子ひじ山の石器時代遺蹟その十」は、江馬の土器研究のひとつの到達点でもあった。江馬は関東の研究成果に学び飛騨の土器研究を進めながらも、機械的な当てはめは行わず地域性の把握にも努めようとしたし、石器時代の経済的・社会的構成、社会学的編年研究の必要性をこの時期に論じている。のちの『ひだびと』論争の萌芽といってもよい。

3 『ひだびと』論争とその後の新展開 1937～1940

いわゆる『ひだびと』論争は、江馬の問題提起に始まった。1937年9月の「考古学的遺物と用途の問題」がそれである。これに対し11月には甲野勇が「遺物用途問題と編年」で反論すると、江馬は12月に「考古学の新動向」で再反論を試みた。翌年1月これに八幡一郎が加わり、「先史遺物用途の問題」で江馬への反論を行った。

土器編年か。遺物用途・生産活動の研究か。編年学派との論争があまりに有名なため、江馬の研究がトータルに評価されることは少ないが（注4）、論争は土器論の重要性を熟知した江馬によって開始されたし、対する八幡一郎らも該博な民族学的知識を有する研究者であり、社会構成史の必要性を痛感していた。そもそも両者は気脈の通じた研究者同士であったし、地域研究推進に関してもほぼ同じ考えであった。両者は論争というかたちで激

しく切り結びながらも、1938 年秋以降、新たな展開を迎えようとしていた。

八幡一郎は、『ひだびと』1938 年 10 月号、1939 年 1 月号で、編年研究を文化領域論へと進展させようとの構想は詳しく述べている。北陸と東海を結ぶ宮川流域の縄文文化の変遷を明らかにし、文化領域の動態を追う野心的な試みである。江馬もこれに応え 1939 年 10 月号、同年 12 月号で、今後の調査計画について、弾むような文章でつづっている。しかしこの研究計画は太平洋戦争開戦によって途絶し、戦後も再開されることはなかった。

4 研究の断絶と敗戦、その後 1941～1975

太平洋戦争に突入した 1941 年 12 月以降、『ひだびと』には江馬の論文や小説は掲載されなくなる。この時期の江馬は、研究や小説に代わって農村を巡回する移動演劇に関心を寄せていた。1941 年、飛騨文化連盟を結成し自らが理事長に就任すると、高山芸術座を結成し飛騨移動劇場を企画した。翌年、江戸前期の浄土真宗照蓮寺のお家騒動をテーマとした郷土史劇「嘉念坊物語」を発表したものの、練習中に特高の捜査を受け、出版物没収の憂き目にあった。封建領主の残虐行為を描いた劇の内容が、軍国主義による言論弾圧を想起させたと考えられる。学問や文学で一定の成果を挙げた江馬であったが、演劇界への進出は当局により阻まれた。しかし、後述の通り、粘り強い抵抗を怠ることはなかった。

1944 年 5 月、『ひだびと』もついに終刊を迎えたが、翌年、江馬に転機が訪れた。東大文学人類学教室が高山に疎開してきたのである。この時、江馬は嘱託に任命された。敗戦後の秋、教室のスタッフは次々帰郷、江馬も上京するよう誘われたがこれを辞退し高山に残った。「軍国主義とファシズムの敗退」を確信し待ち焦がれていた江馬は、「隠れ蓑」であった考古学と決別し、再び共産主義へと身を転ずる。

1946 年、日本共産党に入り飛騨地区委員長に就任。プロレタリア作家として活動を再開したが、本人曰く「故郷を石もて追われ」、再度上京する（注 5）。1966 年、中国共産党とたもとを分かった日本共産党を離党。文革期の中国では最も著名な日本人作家だった。

私生活は奔放で、結婚と離婚、同棲を繰り返す。1975 年 1 月 23 日、老衰と脳軟化症のため東京都立川市の自宅で死去。戒名は焰燿院修智精進居士。江馬の晩年に関しては、天児直美の三部作、『炎の燃えつきる時 江馬修の生涯』（1985）、『魔王の誘惑 江馬修とその周辺』（1989）、『二度わらべ 老人看護奮戦記』（1992）に詳しい。

5 歴史小説『山の民』を読み解く

江馬は考古学や郷土史に没頭しながらも、一方で飛騨で起きた梅村騒動を題材にした小説『山の民』を執筆している。以下、江馬が小説で何を伝えたかったのかを考察したい。

『山の民』の題材となった梅村騒動とは、維新後に起きた大規模な一揆・騒擾である（1869）。政府から初代高山県知事として派遣された梅村速水が、革新的な政策を打ち出す一方で、民衆側には保守的な考えが根強く対立を深めた。両者の溝は埋まることなく結果として騒動が勃発し責任を負わされた梅村速水は 29 歳の若さで獄死することになる。

この小説の特徴は、詳細かつ豊かな情景描写と当時の民衆の生き様を実にリアルに描き出している点にある。フィールドワーカーとしての豊富な知識、小説家としての表現力、江馬のふたつの顔が活きている作品である。江馬は執筆する上で、飛騨各地で丹念な聞き取り聞き取りを行っている。それにより作品に当事者性が生まれ、読者に、どこまでが創作で、どこまでが事実なのかを惑わせるほどの現実味をもたせた。江馬はまえがきで、「梅村騒動を小説として残すことは自分の使命である」と語っている。『山の民』は後世に残す

ことを強く意識し、地道な努力の末に生まれた作品である。江馬がこれほどまでに、『山の民』にこだわりを見せたのはなぜだろうか。以下、おおきく三つに分けて考察をした。

(1)「真に人民的な文学」の実現

江馬はまえがきで、「戦争以前にペンを執りはじめた作者が、ファシスト専制下の長い暗黒の期間をとおして、あくまで新しい民主主義に固執し、その真の人民的な文学の創造のためにたたかった跡を多少なりともこの作によって認めてもらえればうれしい」と語っている。

『山の民』はプロレタリア文学として語られることがあるが、一概にそうとは言えない。確かに、横暴な権力者と虐げられる民衆という階級闘争的構図を見出すことはできるが、一方で作中には、梅村の政治的情熱や人情味あふれる姿の描写が多数みられるなど、民衆側にのみ感情移入する単純な図式にはなっていない。梅村が打ち出した改革が強引だったことは否めないが、彼なりに懸命に職務に努めており、また民衆を思ってこそその改革であったことも確かである（注 6）。「どちらにも言い分がある」。そんな生半可なことを言っていられるような余裕のある時代ではなく、各々に守りたいものはあり譲れない信念がある。どちらが正義か悪か、型にはめて決められるものではない。だからこそ、江馬は教条主義的なプロレタリア文学ではなく、「真の人民的な文学」という、新たなステージをめざしたのではないだろうか。明確な答えがないからこそ、読み継いでいく私たちが主体的にかつ自由に考え意見をもつことができる。既製の枠にとらわれず、まだ決まったかたちをもたない。読者にすべてが委ねられた、読者参加型の文学と言えるのではないか。

(2)父親への想い

江馬の実父弥平は梅村速水の側近であった。江馬は丑年生まれの次男坊であることを理由に、迷信深い母に養子に出された。養家は貧しく「捨て子」と罵られながら冷たくあしらわれ育ったという。自身が江馬家の子であると知ったのは 13 歳の時で、養父母に懇願して生家に戻るが、以後の生活も心地の良いものではなかったらしい。

弥平は江馬が中学 5 年生の時に急逝した。父との関係は極めて希薄だったはずだが、その父を深く敬愛していたと自伝に記している。親の愛に飢え不遇な少年時代を過ごした江馬は、息子の役目として亡父に想いを馳せ、あえて親子としてのつながりを見出したかったのかも知れない。父が忠誠を尽くした相手の悲惨な末路。父のやるせない思いをくみとり、正しい事実を後世に残すことが弔いになると考えたのであろうか。

小説と江馬の個人史の関わりについては、今後も考察を深めていこうと思う。

(3)民衆の強さ

題材となった梅村騒動は、反権力的な性格を有する一揆であるため、検閲の厳しかった当時のことを考えると、極めて危うい題材ともいえる。それでも書き残したいという強い意志がうかがえる述懐が以下のようにある。

「当時はまだ、戦後のように今日のように維新の進歩的な研究が進んでいなかったのも、歴史資料の分析と批判にも私一個の創意と判断によらねばならぬことが多かったが、しかもなお、私を一番にはげましたのは、このおくれた山国で起った大一揆をとおして、何よりも人民大衆の力が歴史の基本的な力としてもっとも力強く作用している事実を、疑う余地なくはっきりと捉えられることであつた。」

様々な思想や学問に通じている江馬であるが、一貫しているのは人間の可能性へのゆる

ぎない信頼である。この小説は、時代を動かすために奔走し、模索した人々がいた証を残すため、そして「今」を変えるための政府への意見書としての役割も担っていたのだろう。

江馬が『山の民』に注いだ情熱は計り知れない。ここまで調べ尽くしたならば、考古学同様に論文として発表する道もあったと思うが、江馬は小説という表現を選んだ。論文は研究が進むたびにアップデートされていく。新しい知見が重ねられ古い解釈は遺棄されていく。しかし、芸術、ここでいう小説は、読み継がれていくものであり、いつの時代も輝きを失わない。そう考えると『山の民』はやはり小説である必要があったのだと考える。

6 江馬の考古学と維新史研究

江馬が考古学研究に打ち込んだ期間はおおよそ 10 年であり、『山の民』の執筆時期とほぼ重なる。細部を見逃さない研究姿勢。マルクス主義史学を学ぶことにより鍛えられた大局的な歴史観。地方史から歴史の本流を見抜こうとする野心的試み。江馬の考古学研究と小説執筆には、共通した方向性が見いだせる。江馬自身、戦後故郷を離れると同時に、考古学の世界からは全く身を引いたが、かつての研究を以下のように回想する。

「私が若い時から興味をひかれながら、その時まで勉強する機会のなかった考古学、特に石器時代の研究が、新しく関心をよんだ。かねて日本の社会経済史の勉強をしながら、いわゆる有史前の原始共産社会について、もっと委しく究めたいという願望を抱いていたからである。」

マルクス主義史学を学んだ江馬にとって、縄文研究は「原始共産制社会の研究」という大テーマにいきつく。土器研究、ひだびと論争、文化領域論構想は、江馬にとっては、大テーマにいたるプロセスであった。同じく、『山の民』執筆も、小説という表現手法をとってはいるが、その中身は梅村騒動をテーマとした維新史研究である。

江馬が小説執筆を開始した時期は、『日本資本主義発達史講座』（1932.5～1933.8）の刊行を機に起こった日本資本主義論争の開始期でもあった。共産党系の講座派は、明治維新後の日本を絶対主義国家と規定し、まず民主主義革命が必要であると論じた。これに対し、労農派は明治維新をブルジョア革命、維新後の日本を近代資本主義国家と規定し、社会主義革命を主張した。この論争により、近代日本の本質規定をめぐって理解が深まったと評価されるが、実態はどうであったろうか。論争に関する江馬の論評はみたことがないが、飛騨の維新研究を通じ過渡期の日本を描こうとした江馬が、日本資本主義論争の動向に無関心であったとは思えない。実際、『ひだびと』掲載の「考古学の新動向」（1937）には、「現実の理解よりも公式を振り回すことのほうに関心が強く働いている」「急進的な歴史家」を鋭く批判している（注 7）。

文献精読と聞き取りによって史実を掘り起こし、飛騨維新史を描こうとした江馬には、当時のマルクス主義史学の在り様は、まさに歴史のリアリズムから遊離した観念的論争に映ったのではないか。『山の民』は、こうした歴史学界への意見書でもあったと考える。

7 江馬の演劇活動

江馬の演劇への関心は、やはりプロレタリア文学との関わりから始まった。東京在住の時代に、築地小劇場でプロレタリア演劇に関わったこともあったが、かねてより計画していた演劇活動の本格化は、『ひだびと』論争を終え『山の民』を刊行した 1939 年以降のことである。当時、飛騨の農山村でも盛んだった地芝居や大衆演劇ではなく、創作芸術としての演劇を、しかも飛騨各地を巡回する移動劇場で行おうという野心的な試みであった。

『ひだびと』には実際に上演された「長兵衛おやぢ」「案山子」「仮の休暇」の三つの劇の戯曲が掲載されている。前二者は農村の一場面を描写した平凡な現代劇であり、江馬自身が語っているように、そこに政治意志の仮託は見られない。一方、後者は死を決意した海軍士官をめぐる人間模様を描いた作品であり、一見して悲壮な愛国劇の体裁をとる。

しかし江馬は当局に対し従順に従う姿勢をみせながら、実際は、反戦主義者としての節を曲げていなかった。戯曲中にもその形跡が見られる。海軍士官の悲恋を扱った「仮の休暇」では、死を決意した士官に恋心を抱く娘が、次のような言葉を父親に投げかける。

「純情、犠牲、死を生きるころ、私たち人間はこんなにやさしい、こんなにつよい、こんなに美しいものなのよ。だから、これが正しい、立派な理想で導かれさえすれば、そしたら、この世はどんなに美しいものになるでせう！」（注8：左のQRコードで朗読の視聴可能）



よく読めば、このセリフに軍国主義批判が込められていることは明らかで、江馬も検閲を恐れていたというが、なぜか特高の捜査を受けることもなく、この劇は上演の運びとなった。しかし、あからさまな権力批判を含む史劇「嘉兵衛物語」は、特高の捜査を受けたため上演できなかった。こちらのほうは江馬の著作『郷土演劇運動の理論と実践』（1944）に「嘉兵衛父子」と改題され掲載された。検閲で不可とされた作品を、著作の中に紛れ込ませて出版する江馬の度胸には驚かされる。これも江馬にとっては戦時下における抵抗活動であり、彼の言葉にいう「芸術的抵抗」であった。

まとめにかえて ～江馬にとっての学問と芸術的抵抗～

「嘉兵衛父子」のモデルとなった浄土真宗照蓮寺をめぐる事件に関しては、宝暦年間にまとめられた『岷江記』（みんごうき）に記述がある。封建領主の暴虐な行為をあばいた暴露本であるが、この文献以外に事件を知る史料は皆無といってよい。

徹底した実証主義による歴史復元をめざした縄文研究、史料の精査や細やかな聞き取りをもとに一部フィクションを交えて創作された小説『山の民』に対し、演劇部門では江馬の創造力が如何なく発揮されている。事実とフィクションとの配分は、考古学・文学・演劇でそれぞれ異なるが、いずれも底流には、軍国主義や全体主義への反発があり、江馬はあらゆる方法で、戦略的にかつしたたかに抵抗運動を継続したといえる。

生誕130周年を迎える今日、郷土岐阜でも江馬の記憶はすっかり薄れつつあるが、江馬こそは真の表現者であったと、私たちは考える。考古学・文学・演劇など、多様な表現方法でアクセスし、その活動のための情報収集や人脈づくりにも抜かりがない。生涯、経済的貧困から脱することはなく、その事績にふさわしい評価を受けることもなかったが、創作意欲と情熱は晩年まで尽きることがなかった。学問と芸術を武器に時代に立ち向かった生涯は、まさに「芸術的抵抗」そのものであった。

戦後の日本は、江馬が望んだ表現の自由のある社会を実現した。私たちがそれを当たり前享受しているこの時代にいたるまでに、彼のように新たな時代をつくろうと奔走した人がいたことを忘れてはならない。

【謝辞】以下の個人・機関にお世話になった。晩年の江馬を献身的に支えた天児直美氏には、著作権に関する許諾と励ましのお言葉をいただいた。記して感謝申し上げたい。

天児直美　　高山市教育委員会　　飛騨市教育委員会　　岐阜県博物館

【引用・参考文献】

＜江馬修著作＞

- (1) 江馬修『一作家の歩み』理論社 1957
江馬の生涯に関する記載は『一作家の歩み』からの引用を基本としている。
- (2) 江馬修『山の民』第 1-3 部 飛騨考古土俗学会 1938-40
- (3) 江馬修『郷土演劇運動の理論と実際』白林書房 1944
- (4) 江馬修『本郷村善九郎』冬芽書房 1950
- (5) 江馬修『定稿 山の民』第 1-4 部 理論社 1958
- (6) 江馬修『江馬修作品集』全 4 巻 北溟社 1973
- (7) 江馬修『山の民 上・下』春秋社 2014

＜考古学関連論文・著作＞

- (8) 高山市教育委員会文化課編『江馬修蒐集品図録 1994』高山市教育委員会 1995
- (9) 雑誌『ひだびと』に関しては、岐阜県図書館蔵書を閲覧・活用した。
- (10) 大村裕「江馬修『一作家の歩み』（理論社 1957 年）と天児直美『炎の燃えつきる時 江馬修の生涯 上・下』（春秋社 1985 年）」『アルカ通信』177・179 2018

＜その他関連論文・著作＞

- (11) 飛騨真宗史編纂会編『岷江記』1935
- (12) 荒川喜一編『大八賀村史』高山市 1971
- (13) 大岡昇平『歴史小説の問題』文芸春秋社 1975
- (14) 塚田光・小山勲・武井則道「江馬修と飛騨の考古学」『どるめん 16 号』1978
- (15) 天児直美『炎の燃えつきる時 江馬修の生涯』春秋社 1985
- (16) 萩原町教育委員会『萩原町史 3 南飛騨の夜明け』萩原町 1987
- (17) 萩原町教育委員会『はぎわら文庫 第 11 集 萩原の維新と梅村騒動』萩原町 1989
- (18) 天児直美『魔王の誘惑 江馬修とその周辺』春秋社 1989
- (19) 天児直美『二度わらべ 老人看護奮戦記』影書房 1992
- (20) 永平和雄『江馬修論』おうふう 2000
永平氏の著作では小説家・劇作家としての江馬の業績の総合的評価が試みられている。本稿は永平氏の業績を継承しつつ、さらに考古学・郷土史学の視座を加えた。
- (21) 菅田一衛「江馬修作「山の民」史実とフィクション」『飛騨春秋 484』2001
- (22) 柴口順一「江馬修『山の民』研究序説 1～11」『帯広畜産大学学術研究報告』25～35 2004～2014

【注釈】

- (注 1) 『ひだびと』論争の評価をめぐる江馬修の考古学的業績、さらに文学との関わりに関しては、2019 年 5 月 19 日、第 85 回日本考古学協会総会高校生ポスターセッションにおいて発表した（「雑誌『ひだびと』と江馬修の考古学研究」、『日本考古学協会会報 197』2019）。本研究では、さらに小説・演劇に関わる詳細な分析を加え、考古学・文学・演劇・雑誌編集・政治活動など、江馬の多様な活動に関する総合的研究を試みた。
- (注 2) 地域研究部員の梅田拓海・辻龍成・江崎晃定・片桐昂大・岡本優奈・土田真菜・石原伶緒・吉川奎騎は、高山市・飛騨市における資料調査・実地踏査に参加し、考古学・郷土史

関係の論文・著作の精査を行った。文芸部員的那須優花・小林未紗は小説『山の民』の分析を行った。演劇部員の山中元太は、小林・那須の協力をうけて、戯曲の分析を行い朗読劇による一部再現を試みた（注 8）。

（注 3）江馬は当時の心情を次のように語っている。「わたしたちをがっちりとりまいていて、奇怪な、巨大な権力機関に対し、自分個人とその思想がじつに無力で、何らなすべき路をもたないことを自覚しはじめた。これまであくまで自由であると信じていた自分の信条も、立場も、生活も、こうした権力の前にはひとたまりもなく吹きとんでしまうものであることが分かってきた」と語っている（「一作家の歩み」）。

（注 4）戸沢允則「日本考古学史とその背景」『日本考古学を学ぶ 1』（1978）、永峯光一「総説」『論争・学説日本の考古学 2』（1988）は、在野研究者（江馬修）と大学研究者（八幡一郎）との間に、埋めようのない断絶があったとの立場をとっている。

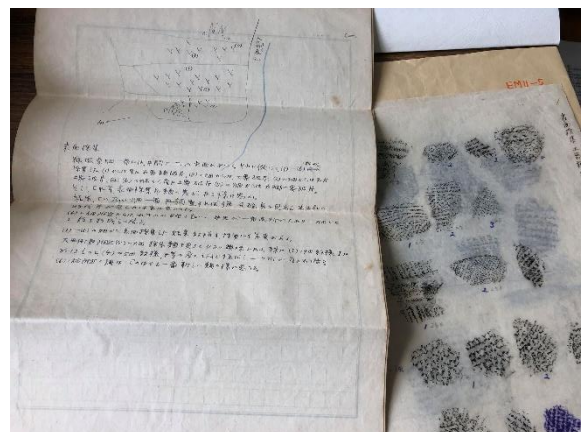
（注 5）考古遺物は、1950 年、江馬が故郷を離れ上京する際、二木家に託され 1989 年に高山市に寄贈された。「飛騨地域考古資料」と称される資料は国指定有形登録文化財となり現在は高山市に保管されている。段ボール箱 46 箱分の遺物は総点数 9407 点に及ぶ（土器 8,731 点、石器 659 点、他 17 点）。大半が土器片であり、中でもひじ山遺跡の土器は 1,922 点と最も多い。記録類は 117 点で、糠塚遺跡の発掘日誌や関東各地の遺跡出土土器の写真もある。

（注 6）下呂市萩原では善政を行った知事としての言い伝えが残り、梅村速水にちなむ梅村堤防が今なお治水堤防としての役割を果たしている。萩原町（1987・1989）を参照。

（注 7）マルクス主義史学の立場から日本古代社会を論じた渡部義通らの『日本歴史教程』（1936・37）を批判しての発言と考えられる。日本資本主義発達論争に関しては、『日本資本主義発達史講座』（岩波書店 1935）、野呂栄太郎『日本資本主義発達史』（岩波書店 1954）を参照とした。

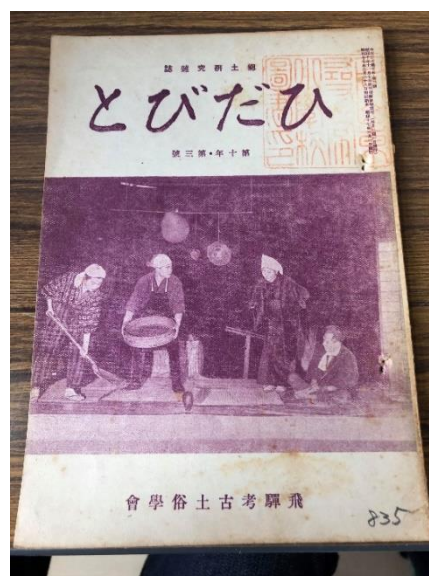
（注 8）山中元太と小林未紗による朗読劇。「仮の休暇」の一部を再現した。

【写真図版 その1】 江馬修蒐集資料の調査



2019 年 1 月 12 日、高山市風土記の丘学習センターにおいて江馬資料の調査を実施した。高山市教育委員会のご厚意により、段ボール箱 46 箱分の資料を、報告書や雑誌『ひだびと』の記録と照合しながら調査した（左写真）。ひじ山遺跡の調査メモ類や『ひだびと』掲載の土器拓本など（右写真）、貴重な資料を実見することができた。

【写真図版 その2】 江馬修保管の写真と雑誌『ひだびと』の表紙



左写真は江馬修保管の写真。昭和初期、飛騨の山村の民家を撮影したものと思われる。屋根は板材をもちいた樽板（くれいた）葺き。江馬は、梅村騒動のための聞き取り、民俗採訪、遺跡踏査を兼ねたフィールドワークを飛騨各地で頻繁に行った。右写真は雑誌『ひだびと』の表紙。「長兵衛おやぢ」の一幕。

【写真図版 その3】 飛騨市古川町及び宮川下流域の踏査



2018年8月9日、飛騨市観光課及び吉城高等学校の協力を得て、飛騨市古川町及び宮川下流域の踏査を行った。古川町では『山の民』の舞台となった古い街並みや酒蔵を訪ねた（左写真）。翌日は、江馬修が八幡一郎とともに文化領域論を構想した宮川下流域（宮川町）の踏査を行った。飛騨市教育委員会の案内で、飛騨みやがわ考古民俗館を訪れ、八幡の構想の発端となった北陸系縄文土器や硬玉などの出土品、国指定有形民俗文化財を見学した（右写真）。八幡や江馬が実際に踏査した流域の遺跡踏査や、『山の民』にも登場する山村の生活を今に伝える民具類の見学は研究を進める上で貴重な体験となった。

遺跡から見る縄文の人々の生活とその変遷 ～岐阜県美濃市の事例～

梅田拓海（高校 72 回生）

要旨

美濃市は山林や河川のような豊かな自然環境に恵まれており、現在、古いものでは後期旧石器時代の中頃に遡る遺跡が発見されている。本稿では、美濃の縄文時代及びその前後の時代の遺跡・出土遺物から古代に美濃で生活した人々の生活形態とその変遷を考察した。

はじめに

はじめに、現在の美濃の自然環境について参考までに説明する。前述の通り美濃市は自然環境が豊かで、濃尾平野の最北端に位置する。現在の総面積 117.5K m² の内 80% が山林であり、北方には千メートル級の山々がそびえる。また、北東から中央へと長良川が貫流し、西から流れる板取川と合流している。

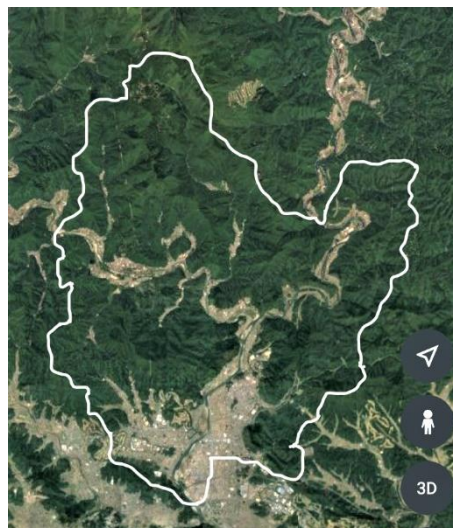


図 1 現在の美濃市の航空写真
(Google Earth)

1. 縄文以前の美濃

縄文以前、つまり旧石器時代の遺跡に関しては、岐阜県内では約 1,000 カ所の発見があり、市内には 1 カ所の遺跡がある。また、該当遺跡以外でのスクレイパー 1 点が採集されたという記録がある。県内の代表的な遺跡は寺田・日野遺跡(岐阜市)、赤土坂遺跡(関市)、恵日山遺跡(加茂郡富加町)などがある。

1.1 丸山古窯跡

丸山古窯跡自体は白鳳期の遺跡であり、美濃市の南西部に位置する山の斜面にある。この山の入り口西北部にてエンドスクレイパー(5～6 cm のチャート製)が、そして詳細な記録はないが細石器がこの山から採集されており、どちらも包含層は不明だが採集地点から丸山のいずれかの層に包含されていたと考えられる。

1.2 向中野遺跡

向中野遺跡は、美濃市の南部松森から関市の下有知にかけての広大な範囲に遺物が散布する縄文～古墳までの複合遺跡であり、この遺跡から南南西 1 km に位置する松ヶ洞遺跡からは握斧状石器が出土していることから、この辺りは旧石器時代の遺跡が複数存在していることが分かる。旧石器時代に該当する遺物は細石刃 1 点、細石核 2 点、石刃状剥片が採集されていることから、この遺跡が形成されたのはナイフ形石器の文化が出現する後期旧石

器時代の中頃に遡ることができる。

2. 縄文時代の美濃

美濃には県内の中でも比較的多くの遺跡があり、草創期に遡るものもある。今回はその中から 5 つの遺跡を取り上げる。

2.1 港町岩陰遺跡（写真：筆者撮影）

港町岩陰遺跡は、美濃市の中央部の清泰寺山北麓の北側岸に位置し、古生層の硅岩の岩崖により形成された幅 20m、奥行きは最深部で 8m、天井までの高さ 5m、北面に開口した浅い洞窟遺跡のような形状をとっており、40m を隔てて長良川がある。民間信仰の対象となっており、どんど焼、山の講などが行われ、最深部に「山神」と彫られた石碑がある。発掘の結果 I ～ VI 層までの包含層が確認された。以下に各層からの出土遺物を記す。



I 層は黒色の表層で攪乱が見られた。土器類は安行式、加曽利 B 式、堀之内式、里木 II 式に類似したものが出土、石器類は石鏃、石錘、削器、打製石斧が若干出土した。

II 層は茶褐色で上部と下部に分かれており、総出土石器の内約 80% の石器が出土した。上部の出土した土器類は中期前葉に見られる竹管による太い沈線を縦に施したもの、中期に見られる太い平行沈線で施文された胎土の粗いものが、下部からは前期後半に見られる北白川下層式のものが多く出土し、薄手で胎土が細かく焼成も良好な北白川 III 式も出土した。石器類は砂岩製、一部珪質岩製で 8.7g～211g の石錘が 130 点、チャート、珪質岩製の石匙の横形が 7 点、縦形が 10 点、チャート、一部黒曜石、下呂石の安山岩製で全て無柄の形状の石鏃が 17 点、その他搔器、削器、河原石の一端を平坦に加工した安山岩製の磨石、チャート製の石錐 2 点、一カ所穿孔し先端の一部が磨いてある牙製装飾品が 1 点出土した。

III 層は砂っぽい黄色土層で、I・II 層より若干厚く北向きに傾斜しており、土器類には前期初頭の本島式に比定される上部に薄い凸帯文を張り付けて表面を貝殻で描いた条痕文があるものや、早期後葉の入海式・粕畑式・石山式が、石器類にはチャート製石鏃、珪質岩製搔器、頁岩円礫製両刃礫器、チャート製彫刻様石器 1 点が含まれる。

IV 層は暗褐色の小円礫を大量に含む堆積層で、遺物の出土量が少なく、出土遺物には磨滅痕が見られたことから、長良川の氾濫によって形成された可能性がある。出土した土器類には早期の高山寺式に比定される楕円押型文土器が、石器類には若干の石鏃と先端が研磨され胴部に膨らみがある乳白色のチャート製の異形部分磨製石器が含まれる。

V 層は砂っぽい黄色土層で、北側に堆積が厚く遺物の出土数が少なかった。出土した土器類には早期前葉の細久保式に比定される押型文土器が、石器類にはチャート製石鏃、剥片鏃類似の石器、表面のみ剥離しているチャート製搔器が含まれる。

VI 層は褐色粘質で、出土した土器類には草創期の柊の湖 II 式の表裏縄文土器一片が、石器類には基部のみのチャート製石槍、安山岩製楔形石器が含まれ、攪乱層からは拇指状搔

器が出土した。

出土遺物の中で、磨石・石錘・石匙はⅢ層以下では見られず、Ⅳ層の異形部分磨製石器は西日本から中部日本各地に分布しているものに類似しており、早期の押型文に伴って出土していることから同時期のものの可能性がある。

中期、後期の土器拓影(図 2)と前期の土器拓影及び実測図(図 3) (美濃市史 56、57 頁)



図 2

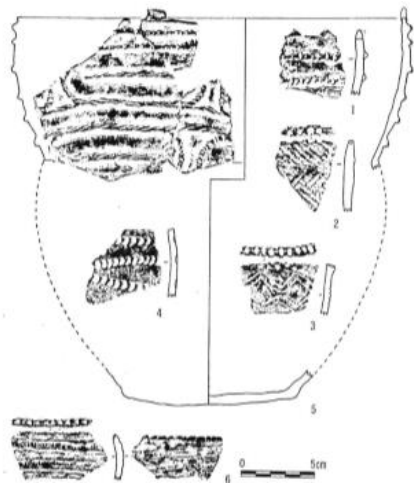


図 3

前期～後期に伴う石器の実測図(図 4)と早期、前期初期の土器拓影(図 5)、早期に伴う石器の実測図(図 6)

(美濃市史 58、59、60 頁)

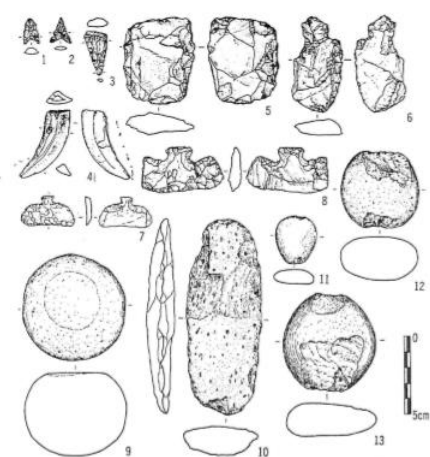


図 4

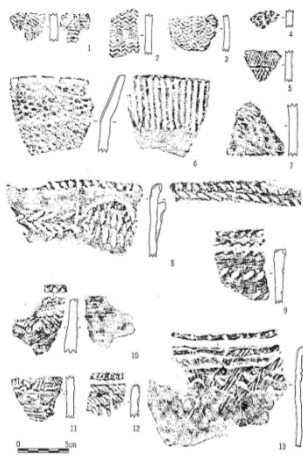


図 5

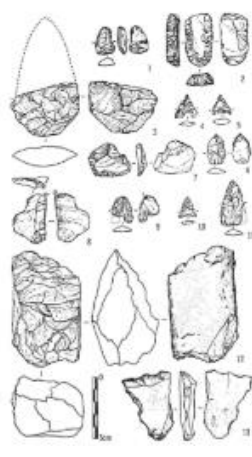


図 6

今回の研究に際して、本遺跡にフィールドワークに訪れたところ土器 5 点と陶器 4 点を

採集することができた。以下に採集した遺物の写真に備考を加えて紹介する。

土器 1



口縁部が外側に折り返してあり、図 2 の 4 の土器と文様が似ている。

土器 2



外面に 2 か所の凹線文が見られる。

土器 3



外面(左)内面(右)共に文様は確認できないが、内面には指で撫でたような跡がある。

土器 4



外面(左)内面(右)共に文様は確認できないが、内面に炭化物のようなものが見られる。

土器 5



外面(左)内面(右)共に文様は確認できず、胎土がやや粗い。

陶器 1



作りはやや雑だが外面に釉薬が塗ってあり、裏面には足のようなものもある。

陶器 2



外面(左)内面(右)ともに釉薬が塗ってある。

陶器 3



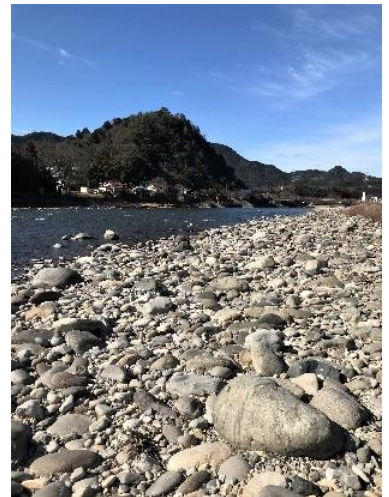
底部と思われ、裏(右)の左端に僅かに釉薬が確認できる。

陶器 4



厚さが 1cm ほどあり、外面(左)に釉薬が塗ってある。

以上より、港町岩陰遺跡は他の岩陰遺跡より比較的大規模なもので、縄文初期からその使用が始まり、出土遺物の割合、種類から前半期、特に前期に最も使われ、移動生活をした人々のキャンプ地であったと考えられ、中期、後期にも使用の痕跡はあるが、その頻度はあまり高くなかったと考えられる。石錘が出土していることから、この遺跡を利用した人々は、縄文の基本的な狩猟・採集の生業に加えて漁労も行っていたことがわかる。しかし、磨石・石錘・石匙はⅢ層以下では見られないことから、前期後葉までこの遺跡を利用した人々は網を用いた本格的な漁労は行わず、石匙の文化はこの時期以前はなかったと考えられる。また、Ⅳ層の異形部分磨製石器は、主に西日本から中部に分布しているものの特徴と類似しており、早期の押型文土器に伴って出土していることから同時期のものの可能性がある。出土した石器の石材は多くが近くの長良川の河原から採集したと考えられるが、一部黒曜石や下呂石製の石器が出土していることから一定の行動圏・交易圏を持っていたことがわかる。そしてこの遺跡は、生活拠点としての使用が終わった後も信仰の対象となり、周囲が開発されていく中で現代まで保全されてきた。



港町岩陰遺跡付近の長良川の西岸。チャートや火成岩が散見できる。（筆者撮影）

2.2 前野遺跡

前野遺跡は美濃市中央やや北の、西を誕生山塊に塞がれ、東に南流する長良川の低い河岸段丘上に位置する遺跡で、地表約 30cm に南北に 2 つのピットが確認され、一つは住宅の下にあったためもう一方のみが発掘された。発掘されたピットは上部はかく乱され、残存部はやや深め(70cm)のすり鉢状であった。出土遺物の大半はピットから出土し、ピット底部への定着がなかったことから、出土遺物は流れ込みによってピットに流入したと考えられる。また、試掘をした際に約 50 点の土器片が出土し、中には渦巻文、円形の文様を持つものがあり、炭化物が付着したものもあった。

出土した土器類は文様がわかるものは全て加曾利 EⅡ 式で、中には中期以降に見られる、細い沈線文がある台形土器の台部があり、石器類は打製石鏃が 7 点であった。

出土遺物の量の少なさ、遺跡の規模の小ささより、この遺跡は小規模で使われた期間は短いと考えられるが、詳しい調査がされていないため断定はできず、今後の進展に期待する。

2.3 勇田遺跡

勇田遺跡は美濃市の東北部の、長良川によってほぼ半円形に囲まれた内側の右岸河岸段丘上に位置する縄文～古墳までの複合遺跡で現在は畑となっている。また、隣接する釜土にも遺物の散布がある。

発掘の結果、土器類は土器片が数十点採集され、大半は後期属するもので中期初頭の五領ヶ台式も見られた。また、岐阜県史には早期のものが発見されたという記述がある

が、確認はできなかった。石器類は短冊型の形状がほとんどの打製石斧が 500 点、蛇紋岩製の磨製石斧が 3 点、石匙の断片らしきもの、石鏃、安山岩製で長さ 13.2cm、幅 19.1cm、口縁部の高さ 6.5cm の石皿、長さ 9.7cm、幅 3.4cm、厚さ 1.8cm の細い刻線がある石剣か石刃の断片、対応する遺物の発見はないがチャート製で長さ 6.4cm、幅 3.0cm、厚さ 1.0cm の有舌尖頭器などが出土した。

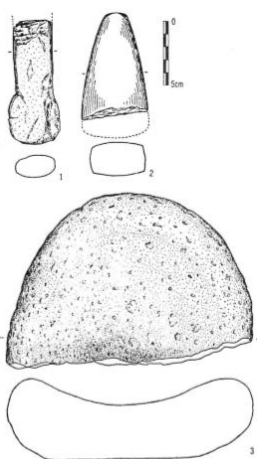


図 7

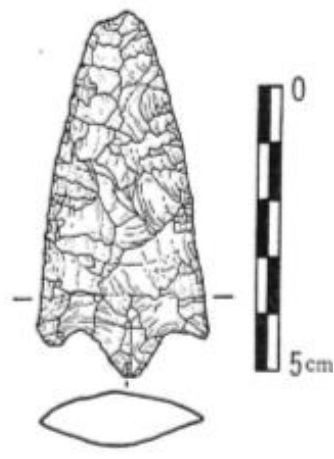


図 8

勇田遺跡出土石器実測図(図 7)と有舌尖頭器実測図

(図 8)、出土土器拓影(図 9)

(美濃市史 68、69 頁)

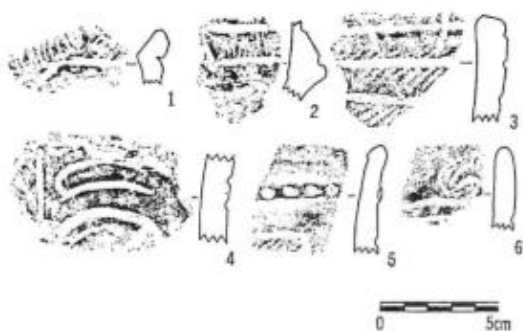


図 9

以上より、勇田遺跡は現段階では縄文中～後期に属しており、打製石斧の出土数が 500 点と圧倒的なことから狩猟・採集のうち採集に力を入れていたと思われる。一方で、この遺跡の近辺には長良川が流れているにも関わらず、港町岩陰遺跡のような漁労の痕跡が見られないことには疑問が残るが、漁労を行うことに関して何かしらのデメリットがあった、もしくは大したメリットがなかったと思われる。また、今回参考にした資料は、出土遺物の層位関係が記載されていなかったため、調査報告書などの資料による検討を要する。

2.4 向中野遺跡

この遺跡は縄文以前の美濃で紹介したものと同一で、中心は東と西を 110m の山に挟ま

れた鞍状の台地で、出土品はすべて表面採集である。採集した遺物は縄文時代のものが多く、特に石器が多かった。

縄文時代の遺物のうち、土器類は採集量が少なく、多くが細片であり位置づけが困難であった。石器類はチャート、安山岩製の石鏃が無柄・有柄合わせて数百点出土し、八ヶ岳産の黒曜石製石鏃4点、小型原石、剥片が採集された。チャート・安山岩製の石匙は縦型、横型含め約50点、大部分が5～8cmのチャート、安山岩製石錘約30点、チャート、安山岩製の石錐が先端部を調整してあるものを含めると約15点、チャート、安山岩製で断片のみの打製石斧数点、異形石器が3点、異形部分磨製石器が1点採集された。

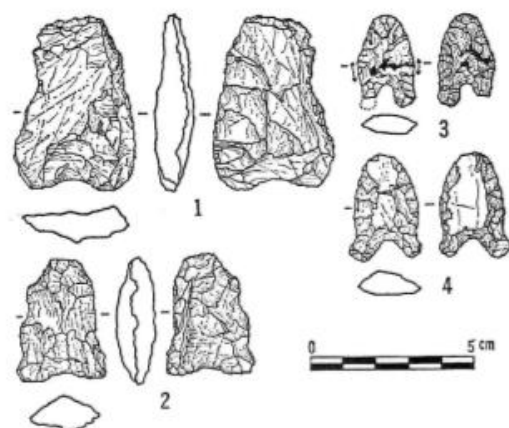


図 10 向中野遺跡出土異形石器実測図（美濃市史 72 頁）

以上より、向中野遺跡は出土品が全て表面採集であるため、規模や性格は推測し難いが、遺物にはいくつかの特徴が見受けられる。まず石鏃と石匙の採集量が他の遺物と比べて多いことから、積極的に狩猟を行っており、一部の石鏃は八ヶ岳の黒曜石が使われていたことから東側に広い交易圏もしくは行動圏を持っていたと考えられ、他の集団との交流や交易の際に、異形石器が集団を示すシンボリックな役割を果たしていた可能性が考えられる。また、現在この遺跡から長良川までは3kmほどあり、近辺に水辺はあるものの大規模な遺跡ではないにも関わらず石錘が約30点採集されていることから、交易の際の交換品としての魚を捕るためか、タンパク源の採集のために定期的に長良川に赴いて漁労を行っていた可能性がある。

2.5 渡来川北遺跡

渡来北遺跡は美濃市南部の西、長良川の支流渡来川の北側の小丘陵南部に位置する遺跡で、小丘陵南部を取り巻くように縄文中～平安時代までの遺跡がある。遺跡の種類は縄文時代の土壌・溝状遺構、古墳時代初頭の竪穴住居が9基、掘立柱建物が5基、奈良時代の竪穴住居が1基あり、遺跡東端の下層からは縄文草創期の石器製作址が確認された。遺跡西側では縄文早期の焼集石土壌が3基・土壌1基、石器製作址と隣接する水場遺構と思われる溝状遺構を伴う配石遺構が確認された。また、焼集石土壌3基からは量の差はあるが炭化物が検出された。



現在の渡来川北遺跡。遺構の一部が再現されている。（筆者撮影）

出土遺物のうち土器類は計85点出土し、草創期・早期・中期のものが確認され、隆起線文土器が3点、回転施文の縄文土器、無文の土器、外面に断面三角形の工具による連続す

る刺突があるものなどが出土した。石器類は草創期、早期初頭、早期後半に属する石器が数多く出土した。大半はチャート製で、他に下呂石・粘板岩・頁岩・流紋岩・安山岩製を主体とする剥片石器が 6543 点、石鏃は未製品を含め 142 点、チャート・下呂石・頁岩製の有舌尖頭器は未製・欠損品を含め 5 点、チャート・安山岩・下呂石・頁岩製木の葉形尖頭器は未製・欠損品を含め 5 点、チャート・下呂石製の石錐が 6 点、チャート・流紋岩製の削器が 17 点、チャート製の搔器が 37 点、チャート・円礫製の石核が 5 点、一部チャート製の搔器から転用されたものがあつた楔形石器が 363 点、剥離用と敲打用で使い分けたと思われる礫製の敲石が 41 点、磨石が 7 点、凹石が 24 点、砂岩・ホルンフェルス製の打製石斧が 4 点のうち 1 点が御子柴型、砂岩製の矢柄研磨器が 1 点、頁岩・砂岩・流紋岩製で一部加熱により赤化している礫器 5 点、両面に磨面があるものもあつた石皿 17 点、敲打痕が連続しているものがあつた台石 10 点、礫製の台付石 4 点、台石から石皿、磨石から凹石、敲石から磨石というような転用された痕跡が見られるものが出土し、その他コナラの炭化種子が出土した。以上より、渡来川北遺跡は出土遺物の量・種類が豊富で、使用された期間は近辺の遺跡を含めて縄文～奈良時代までと長いことから、古代の人々にとってこの遺跡があつた土地は定住に理想的な土地であり、比較的多くの人々が生活していたと考えられる。狩猟に関しては有舌尖頭器が出土していることから狩猟は早い段階から行われていた可能性があり、石鏃を用いた狩りは盛んに行われていたことがわかる。採集に関しても盛んに行われていたと思われ、石器製作場に隣接し主に砂岩で整備された水場から水を汲み、灰汁抜きなどの調理を行っていたと考えられる。また、一部の石器に使われている下呂石は木曽川水系以外の川では入手できないことから、一定の交易圏・行動圏を持っていたことがわかり、その際に近辺のほかの遺跡には見られない整備された水場というものは、定住生活の柱としての役割以外にシンボリックな印象を与えていたと思われる。

2.6 その他の採集地

板取川流域では河岸段丘上や山間の台地などに散布地があり、上野・蔵生で打製石斧が、御手洗地内で石鏃・石匙・縄文土器片が、長瀬で石鏃・打製石斧が採集された。長良川流域では河岸段丘上や小丘頂部などに散布地があり、上河和地内で磨製石斧・石錐などの石器と縄文式土器片が、佐ヶ坂で大型の凹石が、長良川と板取川の合流地点の安毛・浦山では打製石斧・石鏃・石錐が採集され、洲原小学校には校下出土品として縄文式土器片・石皿・磨石・打製石斧が収蔵されている。藍見・大矢田地区には誕生山・天王山による洞や小丘陵が点在し、それらを中心に散布地があり、横越の中洲状地形の場所から打製石斧や石錐が、極楽寺・大知・北野・中切・西畑・土塚・東端・井守山・丸山付近で打製石斧が、北野・中切・丸山付近で石鏃が、東端・井守山で石鏃・石匙が、井守山で石錐が、渡来で石鏃・石錐が採集された。中有知地区では下生櫛地内、春日神社裏手で石錐が採集された。

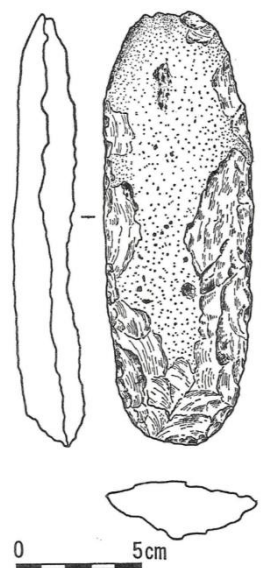


図 11 北野出土打製石斧実測図(美濃市史 74 頁)

中有知地区では下生櫛地内、春日神社裏手で石錐が採集された。これらの記録より、古代、美濃で生活した人々の多くは板取川と長良川という水資源を利用するために水辺近辺に定住地を設定するとともに、美濃の大部分を占める山林から得られる資源も活用する生活形態をとっていたと考えられる。

3. 弥生時代の美濃

岐阜県は銅鐸文化圏に属し、県内 4 ヲ所から計 5 点の銅鐸が出土している。県内では弥生遺跡の調査例は少なかったが、大垣市荒尾南遺跡などで、弥生から古墳にいたる大規模な集落や墓域、木製品の集積遺構の調査が行われ注目を浴びている。美濃市付近では重竹遺跡(関市)、大杉遺跡(関市)が発見されている。

3.1 向中野遺跡

向中野遺跡からの弥生時代に該当する出土遺物は、東海地方の弥生時代初頭に見られる、口縁部に波状の隆帯文が施された水神平式の土器 1 点、大形の甕型土器の胴部と考えられる、二条の波線状の文様が施された高蔵式の後期土器片 1 点が採集された。

3.2 丸山

丸山からは、古窯跡発掘の際にも表面採集されたという記録はあるが、確認はできなかった。中期に見られる、表面に条痕文、裏面に口縁のみと思われる突刺文がある貝田町式の口縁部 1 点が丸山二号窯の灰原付近から表面採集されていることから、築窯、生産の際に利用した付近の粘土(矢田川辺りなど)から混入した可能性がある。

3.4 勇田遺跡

勇田遺跡からは後期に見られる、横に引かれた数本の条痕とその下に連なる突刺文が施された胴部に張りのある甕型土器の胴部と考えられる土器片が 1 点、貝田町式の土器、型式不明の土器片 1 点が出土した。

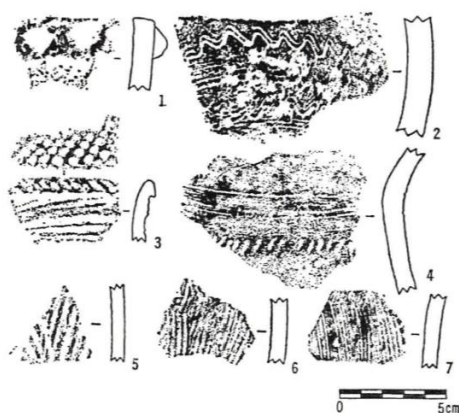


図 12 市内出土の弥生土器 (美濃市史 77 頁)

- 1, 2 向中野遺跡出土遺物拓影
- 3 丸山遺跡出土遺物拓影
- 4~7 勇田遺跡出土遺物拓影

弥生時代の美濃に関しては遺跡、出土量が少いため、縄文時代とのつながりや変化の推測が困難であり、今回扱った資料だけで考えた場合、縄文晩期から弥生前期にかけて生活

が停滞し、一部の集団はこの地域から離れていった可能性があると考えられるが、一方で渡来川北遺跡のように定住し続けた例もある。また、市内の弥生時代の遺跡の一部は縄文時代の遺跡との複合遺跡であるということは、一つの特徴と言える。中期頃には再び活動が活発化していくと考えられるが、こちらは有効な資料が少ないため今後の発見・研究に期待したい。

4. 古墳時代の美濃

県内では前期古墳の円満寺山古墳(南濃町)、全長 137m の昼飯大塚古墳(大垣市)、115m の琴塚古墳(岐阜市)などが代表的で、時期・形態・規模の上で特筆される古墳は、大垣市・大野町・岐阜市・各務原市・可児市に多い傾向がある。

美濃市内では小規模な円墳 22 基に加え、方格規矩四神鏡と呼ばれる銅鏡が出土した前期初頭の古墳である観音寺山古墳（墳丘墓とする説もある）や、現存する後期古墳の殿岡古墳、前野古墳などが確認されており、古墳時代初頭と後期にそれぞれ一帯を支配する有力な首長が存在したと考えられる。特に観音寺山古墳の被葬者は、後漢の銅鏡が副葬されていることから注目を浴びている。

5. 総括

本研究では、美濃市史に記載された縄文時代の 4 遺跡、及び市史編纂以降に発掘された 1 遺跡、市史に記載されたその前後の時代の遺跡について、市史や報告書の記述を参考にしながらその性格や人々の生活を推測してきた。以下にその総括として美濃全体における人々の生活及びその変遷を述べる。

縄文以前すなわち旧石器時代の美濃には、遅くとも後期旧石器時代中頃までには人々が生活していたことがわかる。生活圏・行動圏は南部にあったと考えられる。

縄文時代になると美濃南部に生活圏があった人々は、豊かな資源、生活などを求めて長良川に沿って北上していき、美濃北部へと足を踏み入れ、その過程で一部の集団が生活に適した土地を各地で見つけ、生活の拠点としていったと思われる。縄文時代の北部の遺跡の増加は、南部から北部へと長良川に沿って人々が次第に生活圏を変化させていった、もしくは北部から新たな集団が入ってきたのではないかと考えられる。そして、生活圏が変化していくと同時に生活形態も変化していき、平均的に縄文早期、前期までは狩猟・採集のうち狩猟が盛んに行われており、採集も継続的に行われ、その後は植物資源の多角的な利用が行われた。また、長良川という水資源の恵みを利用した漁労が草創期～早期から美濃南部～中央部にかけて行われていた。一方で、北部の地域では漁労を採用せず山の恵みを利用した人々もいるが、その理由に関しては研究の余地が残る。中央・南部で生活する人々は、交易圏・行動圏が広く、八ヶ岳産の黒曜石を手に入れる集団までおり、異形部分磨製石器はこのような交易の際などに集団のアイデンティティを示すシンボルのような役割を果たしていた可能性がある。異形部分磨製石器に関しては、他の地域でみられるものとの類似点があることから、外部との交流の中で手に入れたか情報を入手して自分たちで製作したと考えられるが、今回の資料から考えると美濃で生活した人々の交易圏・行動圏は東側に広く、西側の交易圏・行動圏は狭いと考えられるため、異形部分磨製石器の文化が何処からどのように入ってきたかということについては研究の余地がある。

縄文以降は一時期活動が停滞しているように見えるが、渡来川北遺跡のように一部の地域では継続して活動が行われており、縄文時代の遺跡があった地に弥生時代の遺跡が形成されているものもある。また、古墳時代に入ると長良川沿いに古墳が形成されることから、それまでに美濃にいた集団の活動が活発化した、もしくは外部から新たな集団が入ったことによって、一帯を支配するような強力な首長が出現したと考えられる。

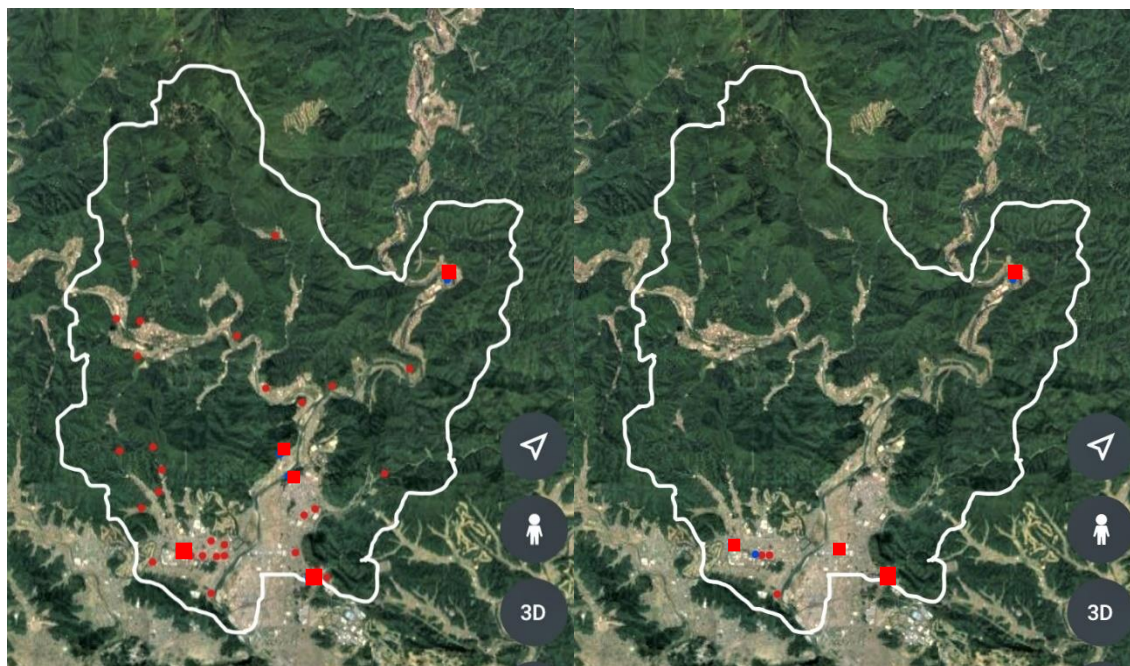


図 13 美濃の縄文時代の遺跡の分布図 図 14 美濃の弥生時代の遺跡の分布図

最後に

本研究においての考察等は説得性のある資料と共に論ずるべきなのだが、参考資料、時間、筆者の技量等の要因によって十分に研究をすることができず、中途半端なものとなってしまった。また、一つの地域性を明らかにするためには他地域と比較し、相対化することで行うことができるのだが、上記の要因によって完遂できなかった。

しかし、今回の研究から資料の見方やまとめ方、研究の進め方など様々なことを学ぶことができたため、今後、このような活動をする際には今回の研究で学んだことを生かしていきたいと考える。また、美濃の古代は現在も未解明な点が多いため、今後の美濃の考古学研究の発展に期待するとともに、この研究が何らかの形で役に立つことを願う。

参考文献

美濃市 1979「美濃市史 通史編上巻」美濃市

美濃市教育委員会 2008「渡来川北遺跡発掘調査報告書」美濃市教育委員会

美濃市教育委員会 社会教育課 1999「美濃市遺跡分布地図 美濃市文化財調査報告書」

美濃市教育委員会

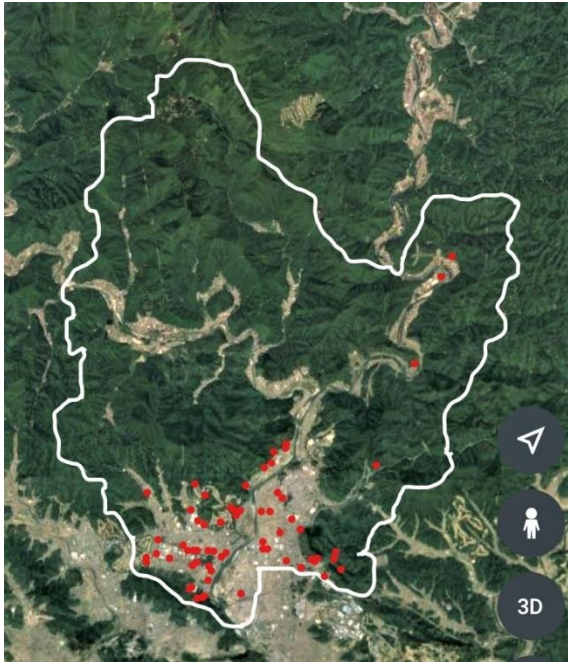


図 15 美濃の古墳時代の遺跡分布図

●は今回扱わなかった遺跡を、■は今回の研究で取り上げた遺跡を表している。

(Google Earth、美濃市遺跡分布地図 美濃市文化財調査報告書 66 頁より)

小原佐忠治と美濃加茂事件 ～備忘録として～

林 直樹（地域研究部顧問）

はじめに

江馬修の小説『山の民』のテーマにもなった梅村騒動（1869.2～3）は、維新政府の新政策反対して民衆がおこした新政反対一揆の先駆的な事例とされる。現行の高校日本史教科書では、徴兵制や学制による負担増加を嫌った血税一揆（1873）、税制改革に反発した地租改正反対一揆（1876）などを紹介し、このような民衆の不満は、「各地の士族反乱が鎮圧される中、地租の軽減で農民の不満がいくぶん緩和された…」と取り扱っている。

その後、負担増に対する民衆の不満は、1881（明治 14）年、松方正義大蔵卿による財政緊縮・デフレ策によって再燃する。物価暴落と深刻な不況、小作農の激増が社会不安を招き寄せた結果、民権左派と貧農による直接行動が各地で発生したのである。

教科書でも取り上げられる福島事件（1882.11～12）、高田事件（1883.3）、群馬事件（1884.5）、加波山事件（1884.9）、秩父事件（1884.10～11）以外に、岐阜県内では美濃加茂事件（1884.7）が発生したが、他の事件とは異なり教科書や資料集に登場することもなく、舞台となった美濃加茂市や富加町でもすっかり忘却されたできごととなった。

今回、地域研究部報告第 2 号を発刊するにあたり、明治期の岐阜県で起きた農民騒擾の事例として、中心人物・小原佐忠治を軸に事件の概要を紹介したい。

事件の顛末

1840（天保 11）年、加茂郡木野村に生まれた佐忠治は、中蜂屋村諸田の小原家の養子となった。近隣農民のリーダー格として知られた佐忠治は、折からの不況と増税に苦しむ貧農を見過ごすことができず武力蜂起を企てた。

1879（明治 13）年、佐忠治は愛国交親社（名古屋で結成された民権運動の結社）に加わり、加茂郡一帯のリーダーを務めていた。佐忠治は名古屋の組織にも蜂起を呼び掛けたが賛同は得られず、1884（明治 17）年 7 月、加茂郡川浦・加治田・伊深・山之上（現美濃加茂市及び加茂郡富加町）の村々の農民を率いて蜂起した。減税（地租軽減・地租以外の諸税廃止）と徴兵令廃止をスローガンに、竹槍や鎌で武装した農民の数は 350 とも 450 とも伝えられる。

山之上村の**富士山（上写真）**を本部とし、野地原と伊深天王社（**現・高倉神社、下写真**）に支部を置いた農民勢に対し、岐阜・関から向かった警官隊は武力鎮圧をめざす。警官隊との闘いに敗れた農民勢は富士山に 3 日間立てこもったが力尽きた。





中山道沿いに脱走した佐忠治は埼玉県浦和で逮捕され、10年の重刑に服したが、帝国憲法発布の恩赦により数年で出獄した。晩年は蜂屋小学校のそばで文房具店を営み（現 JA めぐみの蜂屋支店付近、左写真）、ひっそりと余生を送ったという。1907（明治40）年11月29日死去。周囲の視線は相当厳しかったと伝えられる。

この事件、当時は東濃暴動と呼ばれた。新聞記事は農民側に批判的で、佐忠治に関する賭博や女性関係の醜聞にまで触れている。

事件の舞台を歩く

蜂起勢が立てこもった富士山は標高357m。その姿から山之上富士とも呼ばれる。江戸中期の臨済宗の僧侶として知られる白隠（1685～1768）が山之上で修業した際、身のまわりの世話をした鹿野善兵衛が、先祖代々信仰していた富士浅間大菩薩（木花咲耶姫命）の霊場として開き、金色の阿弥陀像を山頂の祠に祀ったという伝承が地元に残されている。毎年4月の第3日曜には「山之上お富士祭り」が、氏子たちの手によって今もとり行われている。

一帯は「みのかも健康の森」と呼ばれる県指定の生活環境保全林で、レクリエーションや自然観察の場として利用されている。富士山山頂までは遊歩道が整備されており、山頂には今も富士神社が鎮座する。小さな祠ではあるが、龍や象、牡丹をあしらった彫り物はずいぶんと立派であるし、長年の風雪で古色を帯びた木製狛犬2体にも魅かれるものがあった（下写真上段）。

記録によれば、山頂付近には、蜂起勢の農民が築いた石塁があったという。この山自体、チャートの岩盤で成り立っていて、いたるところに露岩が顔を見せている。石材には事欠かない地形である。

警官隊との攻防戦はわずか3日で終わったが、見方を変えれば、竹槍や鎌程度の装備で戦った農民たちが、武装警官隊の攻勢を前に3日も持ちこたえられたのは天陰に拠ったがゆえであろう。登山中、農民たちが構築したという石塁の痕跡がないか探したが、それらしきものは見当たらなかった。

「みのかも健康の森」の道路沿い駐車場から池の堤防上にあがり、「健康の砦」方面に向かってしばらく歩くと、山道の脇に小規模な岩陰が見える（右写真下段）。

「住居跡について」と題された案内板には、美濃加茂事件の脱走者が「この穴に潜んでいたのかも知れません」「戦後この穴に父親と娘さんが居住されていました」と書かれている。时期的にみて、戦後この岩陰に住んだという父娘と、美濃加茂事件の脱走農民とが直接結びつくとは思えない。いささか唐突感のあるこの案内板は、どのような経緯で立てられたのであろうか。意味ありげに思える記載である。



農民側の拠点のひとつとなった伊深の高倉神社にも立ち寄ってみた。伊深集落の東の端に位置する神社で、鳥居をくぐって狭い参道を進むと、木立に囲まれた境内にいたる。蜂起した農民たちは、村の戸長役場に押しかけ、周囲の家々に炊き出しを要請したとも伝えられる。

むすびにかえて

美濃加茂事件に限らず、岐阜県域でおきた民衆による騒擾、たとえば郡上の宝暦騒動や飛騨の大原騒動、明治初年の梅村騒動は、いずれも中央政界の動きと密接に関わり合いを持つべきごとであった。宝暦騒動の顛末は、金森藩の改易処分や老中以下幕閣の罷免にまで発展したし、大原騒動の背景には田沼意次の台頭や寛政の改革の影響があったことが知られている。梅村騒動は明治初期の農民一揆の先駆的な存在であるし、本稿でとりあげた美濃加茂事件は、東日本各地で起きた農民蜂起の典型例と言える。

どのできごととも、その史的意義の重要性の割に、知名度が低いのが残念である。「ひいき目」かも知れないが、個人的には、日本史の教科書や副教材でとりあげられてもおかしくないできごとであったと考える。

かつて本校の社会研究部（地域研究部の前身）では、美濃加茂事件の調査を行ったことがあると聞く。さらに最近では、本誌特集にあるとおり、江馬修の業績を通じて梅村騒動や『山の民』に関する探究活動を行い、学会や市民講座での研究発表も行っている。

地域の歴史の掘り起こしや普及活動は、高等学校の郷土研究系部活動の大きな使命でもある。「みのかも健康の森」にやってくる大勢の来場者が、行楽の傍らに、明治 17 年 7 月にこの地で何が起きたのか、ごく自然に学べる工夫が必要である。そんな手立てについて、部員とともに考えてみたい。

参考文献ほか

- ・神保朔朗『蜂屋の歴史』蜂屋郷土史研究会 1978
- ・「人物みのかも⑩ 小原佐忠治」『みのかも広報』（1986 年 2 月号）
- ・『美濃加茂市史 通史編』1980
- ・『岐阜県史 近代上』1967

※「みのかも健康の森」の中に所在する岩陰に関しては、川合治義氏（関高校同窓生、社会研究部 OB）のご教示を得た。岩陰の写真も川合氏からの提供である。

研究の経緯 （以下、「関高SGH情報」からの再録）

飛騨市フィールドワークの報告（2018年8月9・10日）

◇ 飛騨の自然や伝統を生かした産業・地域づくりについて学びました。



◇ アグリビジネス、観光、伝統技術、文化財の保全・活用を学ぶ

日時： 平成30年8月9・10日

参加者： 生徒11名 教員3名

協力： 渡辺酒造店、吉城高校、飛騨市観光課、樹杜屋あらべえ、飛騨市教委

< 1日目 > 渡辺酒造店酒蔵見学、古川の街並み散策と聖地巡礼

SGH 講演会でお世話になったアメリカ人蔵人コディさん、海外担当の木元茜さんに再会。渡辺酒造店の酒蔵を案内していただきました。講演を聴き、さらに現地で酒蔵を見学し、最後はコディさんと木元さんを囲んでの座談会。日本酒の未来、地域発のグローバル展開、日米異文化交流などの話題で盛り上がりしました。

昼食をはさんで、吉城高校の生徒さんと引率の小澤先生と合流。6名の生徒さんに案内していただき、風情ある街並みを散策しました。最初は緊張気味でしたが、次第に打ち解け、アニメ映画「君の名は。」の聖地の話、普段の高校生活や進路の話など、街歩きをしながら様々語り合いました。最後に両校で市役所を訪ね、飛騨市観光課の井谷直裕さん、同地域振興課の横山理恵さんにお会いし、飛騨市の観光戦略についてうかがいました。飛騨市のお話はむろんのこと、岐阜県全体の問題や関市のとりくみについても様々な情報を教えていただきました。現在、インバウンドについて研究中の一年生にとっては、ありがたいアドバイスとなりました。

参加生徒11名のうち5名は帰路につき、残る6名は飛騨市宮川町の民宿をめざしました。途中、水害で寸断された高山線の復旧工事現場の横を通り過ぎ、自然災害の恐ろしさを改めて認識しました。





<2日目> 伝統工法を守る荒木昌平さん、飛騨みやがわ考古民俗館を訪ねる

2日目は、名古屋学院大学の今村薫先生（文化人類学）とゼミ生の皆さんに同道し、伝統的な建築技術を守る荒木昌平さんの工房を訪ねました。鉞（まさかり）、手斧（ちょうな）、大鋸（おが）といった伝統的な工具を使い、丸太を成形し板材にまで仕上げていく実演を見学し、一部体験もさせていただきました。

「飛騨まんが王国」（温泉とまんが図書館が併設されたレジャー施設）で昼食をとったあと、飛騨みやがわ考古民俗館の見学。飛騨市教育委員会文化財担当の三好清超さんに、国指定重要文化財の民具類、県指定文化財の出土遺物（旧石器・縄文時代）の解説をしていただきました。今回のメンバーの中には、5月に日本考古学協会でプレゼンを行ったメンバーが3名参加しており、展示されている縄文時代の土器や石器について、三好さんの解説を熱心に聞き、盛んに質問していました。「見学時間が足りない」「またぜひ訪ねたい」との声も聞かれました。



◇ 生徒の感想

1 日目

渡辺酒造店の見学から、普通に生活していたら知らないような日本酒の造りかたを教えてくださいましたし、独特なマーケティングプランや製法も印象的でした。コディさんも頑張って酒造りを続けて欲しいと思いました。吉城高校との交流では、飛騨の街並みの特徴や歴史ある建物について解説してもらった中で、古い建物に使われている「雲」という造りがおもしろいと思いました。その後の市の担当の方々（伊谷さん、横山さん）のお話は、これから何かするときにとっても役立ちそうな話でした。

2 日目

荒木昌平さんのまさかりパフォーマンスでは、今ではあまり見られない木の加工法が見れたし、実際に貴重な体験ができたと思います。考古民俗館は、あの辺りの歴史がすべて凝縮されたような場所で、北陸と長野の間にあるからこそその土器はとても興味深かったです。また機会があれば是非行きたいと思いました。

日本考古学協会総会の報告（2019年5月20日）

◇ 日本考古学協会高校生ポスターセッションで最優秀賞を受賞しました！

日 時： 令和元年 5 月 20 日（日） 10:00 ～ 16:00

主 催： 日本考古学協会 参加者： 地域研究部 10 名

内 容： 「雑誌『ひだびと』と江馬修の考古学研究」

「国策・研究・観光開発 ～まぼろしの満州遺跡観光ツアー～」

◇ 最優秀賞受賞作品の研究内容

関高等学校地域研究部・文芸部は、昨年度より、『ひだびと』論争で名高い江馬修（えま なかし、1889～1975）の研究を進めています。江馬は作家として活動をする一方で、飛騨の考古学研究の推進役として活躍した人物です。今回の研究では、高山市保管の江馬コレクションの調査や著作・論文の分析を通じ、江馬の業績やその時代背景にも考察を加えました。江馬は作家でもあり、代表作『山の民』の執筆時期は、精力的に考古学研究を行った時期とほぼ重なります（1933 - 1945）。今回の研究では、厳しい言論統制下において、学問や文学を通じ、江馬が何をめざしたのかについても追究しました。

◇ 当日のようす

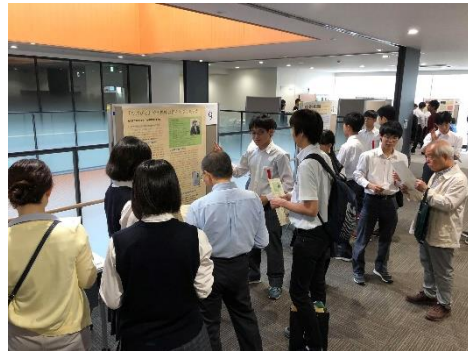
駒澤大学世田谷キャンパスに到着し、高校生ポスターセッションの会場へ。朝から大勢の研究者が来場。緊張気味の生徒 10 名は、研究者の前で代わる代わるプレゼンに臨みました。研究者の方々から質問や意見、具体的なアドバイスをたくさんいただきました。

今回は本校を含め 15 校が参加。関高校はふたつの研究発表を行い、そのうちひとつが最優秀賞を受賞しました。

◇ 生徒の感想より

■ 様々な研究者の方に説明をするのは難しかったけれど、去年よりも自分から進んで話せました。専門家のアドバイスから学ぶことも多かったのも、これからの研究に活かしていけたらよいと思います。今回は難しいテーマに挑みましたが、江馬修の業績について理解が深まりました。時代の流れに埋もれた人物に焦点を当てて研究をするということは、とても意義のあるものだとな今回の発表を通じてよりいっそう感じました。

■ 今回、文芸部員として地域研究部と一緒に学会発表に参加して、とても貴重な経験ができました。緊張こそしたものの、たくさんの研究者の方々が私のつたない話を聞いてくださり嬉しかったです。また全国各地のポスターをみて説明を聞くだけではなく、他校の方々と交流ができ、とても楽しかったのでまたどこかで再会できたらいいと思いました。



「高校生が語る飛騨の歴史」講座 の報告(2019年11月30日)

◇ 吉城高校、斐太高校と連携し、飛騨史を語る市民講座を開催しました！

日 時： 令和元年11月30日(土)

場 所： 飛騨市美術館

参加団体： 関高等学校地域研究部・文芸部 吉城高校地学部 斐太高校科学部

主 催： 飛騨市教育委員会

◇ 高校生による領域横断型郷土史探究セッション試み

吉城高校地学部の黒鉛入り縄文土器（沢式土器）の研究は、学校の裏山の沢遺跡（縄文早期）が研究の出発点。飛騨帯の露頭で黒鉛を採取し、土器成分との比較を試みた地道な研究です。1万年前からはじまった黒鉛利用。晩期にも再度利用されますが、謎はいまだ解明されていません。吉城高校地学部は、次年度日本考古学協会高校生ポスターセッションでの発表をめざし研究をすすめています。これからの研究に熱い注目が集まっています。

斐太高校科学部は、高山陣屋古文書を読み解きながら、安政年間の飛越大地震

（1858）の被害を復元し、跡津川断層の活動との関わりに迫りました。科学部の生徒が丹念に文書を読み、活断層研究に役立てるという画期的な業績です。この研究は今年度佐賀県で行われた全国総文祭において優秀賞を受賞しています。高校生が研究の最前線に立っているといっても過言ではありません。

関高校地域研究部と文芸部は共同調査を行い、作家であり考古学者でもあった江馬修（えまなかし）の生涯を追いました。さらには演劇部の力も借り、劇作家としての江馬の活動にもスポットを当てました。今年は江馬の生誕130年、江馬の代表作『山の民』のテーマとなった梅村騒動から150年。今回の研究が江馬の再評価につなげるよう、さらに研究を続けていく予定です。

この研究は、本年度の日本考古学協会高校生ポスターセッションにおいて最優秀賞に選ばれました。審査にあたった設楽博己氏（東京大学教授）より「最優秀賞に輝いた岐阜県立関高等学校の発表は、江馬修と八幡一郎双方の主張に対する客観的な評価にもとづきひだびと論争に対する学史的のいくつかの見解に批判を加えた内容で、堂々たる論理の展開に感心しました。プロレタリア文学者としての江馬を文芸の視点から掘り下げた、異分野間の共同研究も新鮮で良かったです」との評価をいただきま



した（『季刊考古学』149 2019）。

◇ 参加した生徒の感想

今回の発表の中で、僕たちの研究が一般の人々にどのように受け止められているかということを発表を聞きに来てくださった人々の反応から感じる事ができた。高校生での座談会の際に質問して下さった方に対しては、納得していただけるような回答ができなかったのは心残りであったが、その一方で誇らしさやこれまで行ってきた研究の意義を感じることができた。自分たちの研究に興味を持ってくださるということが、自分にとってはこれまでの活動が認められ、報われたように感じた。また、研究・報告とは、ただ一方的に情報を発信していくという形では不十分で、受け取り手からの反応があつてこそ、意見交換などの形でさらに内容が深まっていき、より高いレベルのものになることができるのだと感じた。

今回学んだ研究への姿勢やその在り方などは、自分がこれからの道のなかで必ずためになると思うので、今後何かしらの研究や発表をする際に念頭に置きたい。

◇ 岐阜県の郷土史研究とふるさと教育、まちづくり

本年度より、県下の県立高校でもふるさと教育が一斉にはじまりました。「ふるさとに誇りをもち、「清流の国」ぎふを担う子どもたちの育成」をコンセプトに始まった教育であり、郷土の歴史や文化を知り、その保全や活用を教育の分野においてめざすことも、ふるさと教育の主要な目標のひとつとされています。

とはいえ、高校の授業で郷土史を学ぶ機会は極めて少ないのが現状です。かつては盛んであった郷土研究系の部活動も全国的に低調で、全国都道府県のうち高文連地方組織があるのは13道県のみであり、本県ではわずかに5校が活動を続けている状態にあります。本県高文連地域研究部会では、こうした現状を改善するために、高文連地方組織による有志の大会を企画し、次年度8月の大会実施を予定しています。

この大会には、いわゆる郷土研究系部活動のみならず、自然科学部や文芸部といった他のジャンルの部活動による郷土研究や、高校生による地域貢献をめざした様々な活動報告などにも、広く参加を呼びかける予定です。

未来のまちづくり、ふるさと教育にとって、郷土の歴史を知ることは必要不可欠な学びです。地域の宝ともいふべき史跡や文化財、今も受け継がれている伝統的な芸能・産業などを再評価し、次世代へとつなぐためにも、高校生による歴史探究や、まちづくり提案における歴史遺産の活用研究を大いに進めていくべきであると考えます。

関高等学校地域研究部では、校内の文芸部や放送部、演劇部といった様々な部活動との連携、他校や行政機関との交流を深めながら、今回の歴史講座のような啓発活動を続けていきます。

＜特別寄稿＞

「行政機関と高等学校が連携した地域史研究の試み ～飛騨市の事例～」

三好清超（飛騨市教育委員会）

はじめに

飛騨市は岐阜県の最北部に位置します。総面積 792.31k m²のうち森林 93%、可住地域の標高差 2600m、市域の大半が特別豪雪地帯という自然豊かなところ。人口は約 2 万 4 千人、高齢化率が 4 割を超えます。この少子高齢化の状況は全国平均の 30 年先の姿と言われる人口減少先進地です。

飛騨市では今後さらに人口が減少していくと考えていますが、この人口減少の危機を回避できれば、全国で苦しむ自治体の先進事例になりうると信じて様々な事業を展開しています。その事業の一つが歴史文化事業であり、教育委員会では飛騨市教育振興基本計画にある「ふるさと意識をもち 学び続ける人づくり」のために活動を行っています。

県立吉城高等学校地学部に協力

令和元年夏、市内にある県立吉城高等学校地学部より連絡をいただき、部活動に伴う調査研究に協力することになりました。当時、同校地学部では、飛騨の黒鉛について研究を深めていたのです。

県立吉城高等学校は、飛騨市古川町上気多字沢の山腹にあります。高校に隣接して、縄文時代早期の標識土器・沢式土器が出土する市史跡沢遺跡が所在します。沢式土器は帯状の押型文が施され、黒鉛を含むという特徴があります。同校地学部では、天生鉾山をはじめ飛騨地域に近年まで稼働していた黒鉛鉱山が多い理由を、歴史及び地質の観点から研究しており、最終的に沢式土器に含まれる黒鉛が飛騨変成帯を起源とするという研究を行っていました。その過程において、8 月には沢式土器を詳細に観察するため、飛騨みやがわ考古民俗館に収蔵展示する沢式土器を熟覧されました。

飛騨みやがわ考古民俗館は、飛騨市内から出土した 5 万点あまりの土器と石器を収蔵しています。展示資料はごく一部なので、当日は収蔵庫から破片資料も持ち出して黒鉛が混入する状況を観察してもらいました。

関高・斐太高・吉城高の地域史研究を飛騨市民に知ってほしい

同校地学部が調査結果をまとめて夏の県内高校での発表を行うなど、研究が進む姿を見ていると、飛騨市民を始めとした飛騨地域の方々にもこの研究を知ってほしいと考えるようになります。さらに、その年度は、県立関高等学校地域研究部他のひだびと論争研究が日本考古学協会で、県立斐太高校学校科学部の安政大地震研究が全国高等学校総合文化祭で表彰されました。関高校地域研究部は平成 30 年度夏に飛騨みやがわ考古民俗館を訪問してくれていましたし、斐太高校科学部の地震研究は飛騨市内も対

象としています。このため、飛騨地域の研究を市民に知ってほしいという思いが益々強くなりました。そして、関係各位のご協力のもと 2019（令和元）年 11 月、飛騨市歴史講座「高校生が語る！」と題した 3 校の発表会を実施することとなりました。主催は、飛騨市教育委員会だけでなく、岐阜県博物館協会飛騨ブロック部会も加わります。同部会が主催に加わると、県内の博物館関係者へスムーズに広報を行うことができるためです。

歴史講座「高校生が語る！」の開催

当日は、司会も高校生に勤めていただきました。県文化財保護センターの基調講演の後、3 校は自身の調査研究を見事に発表されました。各高の発表後には研究者から感想とコメントを頂戴して発表内容のブラッシュアップを試みました。さらに最後に各校生徒による座談会を実施して調査研究の意義を学校間、会場間とで共有を試みました。

各校の発表時間は 15 分ずつでしたが、全て時間内におさめていました。内容はどれも研究史から課題を抽出して研究を行っているもので、いわゆる劇場型研究からは程遠く、フィールドワークを伴う地道な研究姿勢に好感が持てるものでした。

それはアンケート結果にも表れます。当日の参加者は 55 名でした。中には県教育委員会学校支援課 2 名、岐阜市歴史博物館の教育指導主事などの参加もありましたが、参加者満足度が 80%に及びました。これは非常に高い数値です。そして、その回答理由を分析すると、高校生による地域研究の新たな意義が見え隠れしていたのです。

地域に元気を与える皆さんの地域史研究

アンケート意見の代表的なものを幾つか紹介したいと思います。

一つ目に「どの話も分かりやすかったから」「各校とも丁寧に調査されていた」等の意見がありました。これは、自身の研究の説明責任を果たす姿勢を評価してのものと考えられました。先述したように筆者も発表時に感じたことです。

二つ目に、「高校生が地元の歴史について熱心に研究していることに感動した」、「高校生が地元の研究をここまで深く行っていることを嬉しく思ったから」、「（座談会で）研究に取り組んだ感想や意見（を）（中略）楽しく聞かせてもらった」「高校生が個々に分析を掘り下げていて飛騨の歴史に興味を持ってくれていることが良かった」等の意見が多くありました。これは高校生が飛騨地域の研究を行ってくれていること自体が評価されたものと考えられます。

座談会ではこの 2 つの評価が垣間見られました。参加者から「何故あなた達のような若い世代が江馬修という忘れ去られそうな人を研究テーマに取り上げたのか」という質問があったのです。これに対し、「県内を広く研究対象としていることと、考古学研究活動と小説執筆活動の相互関係に興味を持ったため」と真摯に関高地学部代表生徒が回答されます。さらに質問者は「彼をテーマにしてくれたことが嬉しかった」旨の発言をされました。質問者は、関高校の研究姿勢だけでなく、質問者が崇拝してきた人物を研究対象とした取り組みそのものに喜びを感じていたものと思われる。

行政機関と高等学校が連携して地域史研究を行う意義

飛騨市で実施した歴史講座「高校生が語る！」は、高校生の地域研究を周知したいという思いから動き出しました。開催した結果、高校生の研究姿勢が市民に評価され、また、高校生の地域研究自体に喜びを感じる市民が多くいることが分かりました。

ここには、高校生による地域史研究を市民に広く周知すると、地域が元気になるという一つの動きが成立しています。行政機関と高等学校が連携して地域史研究を行う意義は、ここに集約されている可能性が高いものと考えられます。

一方、座談会では、「自分の今後の進路を大きく左右する出来事」という旨の高校生の意見がありました。これは研究を行う本質的意義に触れたからこそその意見と推察されました。また、「自分の興味関心に没頭することが人の役に立っていると知った」旨の意見もありました。自身の研究が誰かの役に立っていると高校生の皆さんにも知ってもらうことができました。

行政機関である私たちは、この双方のメリットをよく理解して、皆さんと連携して地域史研究を進める必要があると考えています。

おわりに

高校生が自身の好きな地域史研究に没頭すると地域が元気になる。これは現状では飛騨市の一事例です。このため、飛騨市教育委員会では、今後も高校生による地域研究に最大限協力し、それを地域に還元する場を設けます。この教育的活動のチャレンジが飛騨市だけでなく、岐阜県や全国の元気になると信じて。

謝辞

最後となりますが、今回の講座でご協力いただいた高校生の皆さんには厚くお礼申し上げます。飛騨市教育委員会では、今後も高等学校による地域史研究が地域づくりとなると信じて歴史講座「高校生が語る！」を継続したいと考えています。今後ともご理解とご協力のほど何卒よろしくお願いいたします。



後 記

地域研究部部誌「岐阜県立関高等学校地域研究部報告」第2号の特集テーマは「江馬修の学問と生涯」である。

岐阜県高山市で生まれた江馬修は、考古学史上名高い「ひだびと」論争で知られる研究者であると同時に作家としても活躍した人物である。飛騨の縄文文化を解明しようとした江馬の足跡を追いかけた地域研究部は、同じく小説家としての江馬の研究を試みた文芸部と協力し、日本考古学協会総会の場において、多面的な観点から江馬修の学問や思想を論じた。この研究にはさらに演劇部員も加わり、劇作家としての江馬の活動にもアプローチを加えた。

偶然ではあるが、2019（令和2）年は、江馬生誕から数えて130年、代表作『山の民』で扱われた梅村騒動勃発150年の節目の年にあたる。この機会に江馬の顕彰を行うべく、飛騨市教育委員会、吉城高校、斐太高校と連携し「高校生の語る飛騨の歴史」という企画で、市民対象の研究発表会も行った。

作家、郷土史家、考古学者、雑誌編集者、劇作家、共産主義活動家。江馬にはいくつもの顔があり、我々はその全体像を把握するため、様々な分野からのアプローチを重ねたが、いまだその全貌をつかむにはいたっていない。江馬研究は、今後も継続的に行うべき重要な課題と考える。

今回の特集では、江馬に関する論考2編、研究ノート2編、特別寄稿1編を掲載した。以下に紹介しておく。

（1）「『ひだびと』で江馬修は何をめざしたのか」

2019年5月20日、日本考古学協会総会高校生ポスターセッションの発表用ポスターを論文形式にまとめたものである。考古学者としての江馬、小説家としての江馬に関しては、考古学・文芸評論のそれぞれの分野では研究されているが、その双方を総合的な観点から考察した論考はみあたらない。今回、我々は、江馬の活躍時期の時代的背景や江馬個人の思想的遍歴への論及も試みた。

本研究は、2019年度日本考古学協会総会高校生ポスターセッションで最優秀賞を受賞した。

（2）「江馬修の学問と芸術的抵抗 ～表現としての考古学・文学・演劇～」

1930年代末頃より、江馬は考古学研究や小説執筆に区切りをつけ、演劇活動に没頭するようになる。従来注目されることの少なかった江馬の演劇活動は、それまで江馬が心血を注いだ考古学研究や文芸活動とどのように関わるのか。演劇論も含めた江馬の総体的評価を試みた論考である。

（3）「遺跡から見る美濃の縄文の人々の生活とその変遷」

2018年度卒業生（高校第72回生）の梅田拓海さんの執筆による研究ノートである。梅田さんは4月より大学に進み考古学を専攻する。本稿は、美濃市内各地の遺跡を踏査し、図書館で市史や報告書を丹念に読みこんだ成果をまとめたもので、80有年前、飛騨各地を踏査した江馬へのオマージュともいえる研究ノートである。梅田さん

の今後の研鑽に期待したい。

（４）「小原佐忠治と美濃加茂事件 ～備忘録として～」

梅原騒動に比べ規模ははるかに小さいが、明治期の農民騒擾として知られる美濃加茂事件をとりあげた研究ノートである。事件発生から130年以上経過しており、すでに当事者から直接伝え聞いた世代いない。事件の掘り起こしや周知をどう進めるか。今後の大きな課題である。

（５）研究の経緯（関高SGH情報より）

今回の研究に関しては、岐阜県博物館、岐阜県図書館、高山市教育委員会、飛騨市教育委員会のご支援をいただいた。この間の経緯については、すでに関高等学校公式ウェブサイト上の「SGH情報」で発表している。本校はその発表の再録である。

（６）「行政機関と高等学校が連携した地域史研究の試み ～飛騨市の事例～」

飛騨市教育委員会学芸員の三好清超さんに執筆していただいた。三好さんは、飛騨市内の発掘調査を進めると同時に、学芸員として市内ミュージアムの運営、様々な啓発活動を熱心に行っている。われわれ地域研究部も、フィールドワークを行うにあたってお世話になった。高校と自治体が連携した活動に関しては、三好さんの論考にも言及があるとおり、今後も続けていく予定である。

また、今般のコロナ禍によって中止のやむなきにいたったが、2020年日本考古学協会において、高等学校と自治体が連携した文化財保全・普及活動に関する発表を行う予定であった（飛騨市・本巣市・富加町・関高校による合同発表）。この件に関しては、他日を期したいと思う。

（地域研究部顧問 林 直樹）

岐阜県立関高等学校地域研究部報告

第 2 号

発 行：令和 2 年 5 月 18 日

発行所：岐阜県立関高等学校

岐阜県関市桜ヶ丘 2-1-1

電話 0575-22-5688

FAX 0575-23-7089

岐阜県立関高等学校地域研究部